

謹賀新年

あけましておめでとうございます。穏やかな新年をお迎えでしょうか。



ここ数年、毎年大きな災害が起きています。今年は、今年こそは、安らかな年でありますようにと願うばかりです。

皆様どうぞお健やかに。手を合わせて日々感謝。

訶梨帝母

最近のテレビは綺麗に映り過ぎではないかと思うことがしばしばある。コロナ禍が拍車を掛けてくれたおかげで、絶景の観光地、各地の風物詩を堪能することもテレビで事足り、満足してしまうという声も聞く。

実物よりも綺麗という声も。かくいう私も、神社佛閣を特集し



た番組は見惚れてしまう。だって、普段立ち入ることができない所へ入ってくれるから。

やっさん



友人からの頂き物。闘鶏神社(和歌山県田辺市)の名前の由来は、源氏と平氏の双方から援軍を要請された熊野別当湛増が

神意を確認すべく、本殿の前で紅白7羽の鶏を闘わせた故事によるもの。勝負の神様、有り難う。迷走ボー

お正月でも普段着のわたしたち



11月に大叔父が住職をしているお寺の落慶式(本堂の建て替えのお

披露目)に参加してまいりました。

村の方々が皆さん参加されての式で、大変にぎやかで楽しいものでした。大叔父は村を流れる川の掃除も嫌な顔せず参加していて、それで村の人もお寺の建て替えを一致協力して進めてくださったと聞きました。過疎化の進む村ですが、それでも皆で守っていこうというところに心打たれました。

征阿

エアコン、石油ファンヒーターではなく、レトロなアラジン製石油ストーブを仕事場で使っています。石油ストーブの匂い好き。芯切りなどメンテナンスも好き。今ストーブ

にのっかっている黒い扇風機のようなもの。最近アマゾンで購入しました。ストーブが点火され天板が熱くなると自動的に羽が回り始め、暖かい空気を横方向に拡散してくれます。電源は使用していませんし、音もしません。



俊徳丸

『友引町内会通信』をスマホでお読みいただくには、<http://www.daigoji-temple.jp/>「友引町内会通信」をクリック。寺務局

盛岡弾丸ツアー

昨年末、気まぐれで「FDA往復航空券十宿泊付き格安ミステリーツアー」に申し込んでしまい決行致しました。行先は出発日の一週間前に岩手花巻空港、宿泊先は盛岡駅前ビジネスHと知らされました。寒いなあ、青森よりいいか、できたら高知龍馬空港がよかつたな、などと思いつながら。

当日、午後便。花巻に到着すると曇まじりの曇天で既に薄暗し。日没も名古屋より早い感じ(結構東ですから)。レンタカーに乗り込み、そこから平泉に走った場合(約一時間)金色堂にたどり着く前に闇に包まれ路頭に迷うな・・・と断念。北上し、盛岡至近の「小岩井農場」へ。雪が降り始めますます暗くなり、「まさばで楽しむワクワク体験♪」どころではない。牛も馬も舎に帰ってしまったって一頭もない、というか暗くて見えない。幸い、四時からイルミネーションが始まり、寒風吹きすさぶ中、息子はお楽しみの一つだった「牧場のソフト

クリーム」を食し、お客少なめのイルミを駆け足で鑑賞して、さっさと盛岡駅の宿へ。



さあ、夕食。吹雪の中をザクザクと歩き駅ビルの「わんこそば」へ。
息子(八歳)が四十五杯平らげる様子を眺

めながらお猪口を傾けておりました。

こもりうた84

翌朝、雪は止み晴天。ようやく
明るい盛岡の
空を見上げて
安堵。
盛岡駅ビルの
展望フロア
へ上がって
360



度を堪能。

南部盛岡は日本の本一の美しい国にござりやんす。西に岩手山、南には早池峰山。城下を流れる中津川は桜の馬場の下で北上川に合わさって、まさに、まさに絵に描いたような美しき国でござりやんす。

(『壬生義士伝』浅田次郎)

映画版では中井貴一、TVドラマでは渡辺

謙が、主人公の盛岡出身吉村貫一郎を演じ、訥々と繰り返すお国自慢のセリフ。その通りの景色を満喫でき、ようやく岩手県を噛み締め・・・も、つかの間。十二時過ぎの便なので、急ぎレンタカーに乗り込み、宮沢賢治も石川啄木も素通りで、途中の「道の駅」で米と酒を買い、花巻空港へ。なんと、午後三時には自宅に戻っておりました。

わかっています。無謀な旅行だったという事は。せつかく空を飛んで行ったのに、盛岡藩史跡、啄木、賢治記念館、遠野で妖怪にも会えず、平泉にも行けず、温泉にも入れず：と云う事をのちに思い出して楽しむ為に出かけた旅行だったと納得しております。息子は、わんこそば体験と「往きは緑のFDA、帰りは金色のFDAだったね！」と喜んでいたので、まあ、よしとします。

※ FDA フジドリームエアラインズ



訶梨帝母

家族の絆 ～年忌の1コマ～



先日、母の三回忌を無事に勤め終えた。世間がコロナ禍の渦中にあった昨年の一周年忌には参列できなかった父も同席して、家族だけではあったが慎まじやかに母を偲び、皆で共に手を合わせる事ができた。

父は二年程前から施設に入所している。自立を支援し、家庭への復帰を目指す名目の介護老人保健施設という施設だ。

二年前に心筋梗塞を患った父は、手術、入院を経てから独居での生活が困難との判断を受けて、現在の施設へ入所することになった。しかし、独居が困難であるとの判断の決め手は、数年前から患っていた認知症の進行具合である。

父の認知症は母が病に臥せた時には既に症状が出始めており、母が予後を過ごす

家庭での生活は壮絶を極めたものがあつた。一人っ子である私は当時の住まいが関東にあり、何度実家へ足を運んだか分からないが、訪れる度に荒れ果てる家内を見て途方に暮れていたことを今でも強く覚えてい

る。最終的には母を関東まで連れて行き、最期を看取ることになったが、一連の儀式を済ませた後、続くように父が病院のお世話になった。そして、入所後は周知のコロナ禍である。面会は完全に謝絶され、施設内は長らく厳重警戒措置が実施されていた。その影響から一周年忌はしめやかに執り行い、父へは施設職員を通じての報告のみとなったが、昨年の警戒措置の解除、緩和を受けて施設へ外出許可を申し出た。

施設外での飲食禁止やマスクの常時着用など条件付きではあるが、およそ一年半振りとなる外の空気を父はどの様に感じていただろうか。送迎中の父は饒舌だった。目に飛び込む景色が変わる度に口を動か

し、思いつくままを話していた。ひと昔の私なら、父の一言一句を聞き逃さずに誤りを正していただろう。しかし、その様なことに何の意味があるのか。もしかしたら、父は今どこに居るのか、どこに向かつているのかすら分かっていなかったかもしれない。車中では、私が相槌を打ち続けるだけの会話にならない話が続いていた。

気を利かせた訳ではないが、家族三人で外食に行った時によく通っていた道、駅まで送迎してくれた道、せがんで連れて行ってもらったおもちゃ屋への道、そうした懐かしい道を選んで父を乗せた車を走らせた。遠回りしながら、時折「覚えてる？」と問い掛けながら、ゆっくり車を走らせた。「覚えていない」、父はそう答えて、また思いつくままに口を動かした。

いい。父が覚えていなくても、私は覚えて

いる。それでいい。運転席と助手席、昔と座る席は違うけれど、次々と心中に去来する思い出の一つ一つに、時を越えて「ありがとう」と伝え

仮に「納采の儀」で、小室氏はどうしたであろうか？

私が妻と結婚して30数年の月日が経過した。私たちは当時「職場結婚」で、それはともかく偶然お互いがお寺に生まれ育った「一人っ子」という境遇であった。いずれ婿さんを迎えてお寺を継いでもらおうと思っていた娘を京都から岐阜へ連れて来てしまったわけで、しかし妻の両親が寛大な人で、これと言って反対もなかったのが平成2年4月に結婚することになった。それに関して今も感謝している。それらを気遣ってか、私の両親は立派な結納の品を用意してくれた。



およそ30年前は、お見合い写真を持って結婚のお世話をしてくれるおばさんがいたり、盛大な結納や結婚式、披露宴をしたり、それを交わす上で仲人さんを立てたりということが行われていた。当時、私の従妹などは、嫁入り道具のタンスを1本減らして「お菓子まき」の菓子を増やし盛大にして欲しいと言っていたのを覚えている。

ある秋晴れの日、私たちの結婚の意思が固まり、妻の両親に正式に挨拶に行くことになった。その際は、職場の上司の方(仲人さん)に事情をお話し、丁重にお願いして一緒に挨拶に行くことを母がアドバイスしてくれた。私たちの共通の上司はそれを快く承諾してくれたのだが、そういうお役目をするのは初めてだったそうで、それに加えその先方が「一人娘」だったこともあり、帰りの車の中で、「ああ、今日は戦争に行った時より怖かったよ…」と疲れ果てた表情で呟かれたのを鮮明に覚えている。その来春、結納の品を上司と二人で収めた。当時の日本はバブル期に沸いており、昔からの結

婚にまつわる習慣・儀式も限りを見せ始めていたように思う。その後それらはあっという間に消滅してしまった。景気の良かった時にブライダル産業がそれらを一新させたのか。以前は、「子の結婚は親の甲斐性、親の葬式は子の甲斐性」と世間で行われていた。それは違うという意見もあるだろう。だから私は両親の旅立ち(葬儀)の際には、できる限り大勢の人々に見送ってもらえるよう精一杯のことをしなければならぬという自覚ができていて、またそうすることが出来たと思う。

先日、11月30日の秋篠宮皇嗣殿下御誕生日会見で、眞子前内親王の「納采の儀」・「告期の儀」・「朝見の儀」の儀式を行わなかったことに関して後悔のお気持ちを述べられていた。以前から私の関心事は、仮に一般の結納に当たる「納采の儀」が執り行われたなら、小室圭氏や母の佳代氏はそれに対してどんな対応をしたかだ。「告期の儀」・「朝見の儀」は皇室側が行う儀式だが、「納采の儀」に関しては結納に当たるのだから、小室圭氏自身が皇室のしきたりに従い準備しなければならない御品があり、それを調べてみた。

- ① 雄雌の特大天然の鯛(2匹で6~8万円)
- ② 清酒(一升瓶6本で5万円ぐらい)
- ③ ドレス仕立て用のシルク金刺繍入生地(?円)

以前の皇嗣殿下の「大嘗祭は私費で」発言などを思い返すと、秋篠宮家自体が日本の儀式を継承する価値をあまり持たない家族のように私には見えるのだが。小室親子に関しては、そんなこと何故しないといけない？ 頭の片隅にも無いような気がするけど。私も皇嗣殿下が言う、「誹謗中傷した国民」の一人なのだろう。事実は殆どの人が心配して書き込んだのだけれど。

俊徳丸

『私説法然伝』(83)

法然がくる⑩

先月号では法然がくるということ、九条兼実について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【建久三年(一一九二年)後白河帝崩御される。白河帝を祖父に持ち、鳥羽帝を父に持ち、三代に渡って絶大な権勢を誇ったまさに「治天の君」であった。院政というものの実質的に最後の時代でもあり、平家と源氏という武家の時代のはじまりでもあり、そんな時代の変化の中で「日の本一の天狗」とも言われるほどの老獪さと絶大な政治力を誇った稀代の存在であった。

兼実の日記『玉葉』にはかつて信西入道が後白河帝を評した言葉の記録がある。

後白河帝は中国や日本において比類なき「暗主」^{あんしゅ}。暗君だが、一度やると決めた事は必ずやる実行力と一度聞いた事は忘れないう記憶力は実に凄いとある。かなりの毒舌だが、よほど強烈な個性の持ち主であった

とわかる。また兼実は鳥羽帝と後白河帝を比べて鳥羽帝の失敗は美福門院得子にすべ

てを与えた(八条院領)ことであり、それに比べて後白河帝はそういう失敗をしない人だと評している。また佛門への帰依の姿を褒め称え、人柄は慈愛に満ち溢れていると絶賛している。しかし延喜の時代の良き政治が失われたのは残念だと書いている。つまり政治的には酷評なのである。

頼朝には「日の本一の天狗」という歴史に残る評価を残されているが、頼朝と後白河帝との会談の結果、一応の平和が今後三十年続くことになる。頼朝は対武家において妥協は一切無かったが、「中央」後白河帝に対しては文句を言いながらもその秩序そのものへの挑戦はしなかった。頼朝にとっての「鎌倉幕府」とは東国における「王権」としても良かったが、後白河帝との会談の結果生まれた建久の平和体制とは、歴然とした日本型「秩序」であった。だがそれはこの時点で頼朝が本来的に目指したものでなく、やはり頼朝は頼朝である。まだまだ腹の中に隠し玉を持っていた。そ

してその隠し球が後々の兼実の政治生命に響くことになる。

建久三年三月の後白河帝の崩御以降の政治は極めて円滑に進む事になる。兼実主導の朝廷の政治は反対派を生み出しても後白河帝という圧倒的な存在を失う事ではばらくは平穏となる。そして兼実の弟である慈円が天台座主となり、政教の安定化が進む。

これは実に京の都にとっては重要な事であった。政治と宗教が密接に関係する時代において政治の安定と宗教の安定は社会の平穩の為に不可欠であった。その象徴となる出来事が戦乱で焼け落ちた興福寺と東大寺の再建である。南都は藤原家の本拠地の一つでもあり、宗教の本拠地でもある。そして法然上人もまた、それらと無関係ではなかった】

後白河帝の時代が終わり、いよいよ「鎌倉時代」となります。「鎌倉幕府」は一一九二年に始まったわけではない、と今の教科書にあるそうですが、事実を見れば後白河帝崩御こそがそのはじまりとも言えるのではないのでしょうか？ 以下次号に続く(征阿)

マスクを外せる頃に

「コロナ前には、高野山や熊野古道に大勢の外国人が来ていた」と聞きました。

推測ですが、聖地巡礼経験者のヨーロッパ人なら、日本でも宗教体験をしてみたいと、高野山の宿坊に泊まり、精進料理を食べてみて、と思ったとしても不思議ではありません。

それと、世界遺産に2番目に登録された巡礼道が熊野古道なのです。

ヨーロッパで世界遺産の多い国は、イタリア(58)、ドイツ(51)、スペイン(49)、フランス(49)の順です(日本は25)。キリスト教の聖地が多く、中世から始まった聖地巡礼が今も続いています。

巡礼道として最初に世界遺産に登録されたのは、映画『星の旅人たち』でも知られる、サン・ジャン・ピエ・ド・ポーというフランスの町からピレネー山脈を越えて、スペインの西端サンティアゴ・デ・コンポステーラまで約800kmの道です。

日本ですと、東京～広島県尾道市ぐらいの距離。

バックパックを背負って35～40日かけて歩く旅です。実際に歩いた日本人は多く、旅行記が何冊も出版されています。

サンティアゴ巡礼道と熊野古道は1998年に姉妹道となり、2014年にはサンティアゴ・

デ・コンポステーラ市と和歌山県田辺市は観光交流協定を結び、翌年から「共通巡礼」をスタートさせています。



熊野古道とは、熊野三山(熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社)へ通じる参詣道の総称で、山岳修行の霊場でもあります。

平安時代、熊野詣は皇族や貴族など一部の人のものでした。浄土信仰が広がると、中世以降は庶民も長く険しい道に列をなすようになり、蟻の熊野詣と呼ばれたのです。

生涯に34回も熊野へ詣でた後白河法皇は、道の厳しさを「熊野へまいらむと思へども徒ち歩より参れば道遠し すぐれて山きびし 馬にて参れば苦行成らず 空より参らむ 羽を賜べり若王子」(『梁塵秘抄』)と詠んでいます。

巡礼途中に息絶えることを覚悟で詣でた人、己が罪を滅し阿弥陀如来の本願によって救われることを念じた人、その心に触れるには、自分も巡礼道を歩くのが一番と思うようになりました。

紀伊田辺駅から中辺路を通る道が最も整備されて気軽に行けるようですが、私が歩きたいのは高野山と熊野本宮大社の2つの聖地を結ぶ小辺路。山を2つ越える70kmの道で3～4日かかるかな。意欲のある人たちによって整備が進められるようです。歴史や伝統に触れながら、日本人と外国人が共に歩き、交流できる道になると思います。 迷走坊